様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成２５年　５　月　１５　日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2012
課題番号：23653046
研究課題名（和文）ＥＵ統合における宗教課題とＥＵ加盟国の世俗主義体制の相克
研究課題名（英文）Conflicts between the religious issues and the Secularism system among the Member States in the EU

研究代表者
八谷　まち子（HACHIYA MACHIKO）
九州大学・法学研究院・教授
研究者番号：40304711

研究成果の概要（和文）：

ＥＵ域内における宗教課題は、ヨーロッパの伝統的な課題である国家と協会の関係ではなく、キリスト教と他の宗教との共存に関する事柄であるといえる。しかし、ＥＵ加盟国は、国教をもっているとしても、「世俗主義」を大原則としており、ＥＵ統合において宗教があえて議論されることはまれである。そうした状況のなかで、本研究開始した時期とほぼ時期を同じくして、いわゆる「アラブの春」の体制変動が起こり、そのことは、体制変動を経験したアラブ・中東諸国との関係の在り方を再考することをＥＵに迫った。すなわち、ＥＵはイスラム教と正面から対峙することを迫られたが、反応は鈍い。ＥＵ側の現状は、研究期間終了後も大きな変化を見せていない。ひとまずは、「アラブの春」の勃発以後の２年間の状況の事実の確認、展開とＥＵが打ち出した対応の分析をまとめることができた。

研究成果の概要（英文）：
The religious issues in the EU are not a traditional European conflict between the state and church but a task for the Christian to co-exist with non-Christian religions. However, mainly because of the fact that most of the EU member states declares secularism even if a National Church is constituted. Under such a situation, religious issues have been rarely taken up within the EU related research field. The unexpected upheaval called “Arab Spring” forced the EU to face the Islam countries and to review its conventional policies toward these countries. But the reaction of the EU has been very slow, basically continuing the existing policies despite the change of the government from the secular to a religious one. Very little development is observed even at the time of the final stage of this research. The research term completed with the fact finding, examining the evolution of the “Arab Spring”, analysis of the (non)reaction of the EU toward “Arab Spring”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論
キーワード：地域統合、世俗主義、ＥＵ

１．研究開始当初の背景

世俗主義とその対をなす政教分離に関する学術的研究は、概念、その法や近代社会形成にとっての意義など、知見の蓄積は膨大である。筆者自身は、トルコの EU 加盟をめぐる研究のなかで、「世俗主義」という厄介な問題に出会った。その後、トルコの「世俗主義」のあり様に関する報告の機会を得、同報告をさらに敷衍して、EU 加盟との関連で世俗主義を考察し、「欧州統合と世俗主義」（九州大学『法政研究』第 73 巻第 3 号）を発表した。日本における EU 研究全般の学術的蓄積は厚いが、統合と宗教の課題は、研究の意義は認められつつも看過されている。特に、2009 年に成立したリスボン条約には、市民社会団体として初めて「宗教団体」が明記され(17 条 3 項)、それまではある政策の背景的要素として扱われるに過ぎなかった宗教要因が、EU 統合過程における課題のひとつとして認識されたといえる。

２．研究の目的

我が国における EU 研究で徹底して看過されている宗教に関わる課題をあぶりだし、加盟国が標榜する《世俗主義》政治体制がＥＵ統合に与える緊張を、トルコ加盟プロセスに焦点を当てて解き明かそうとするものである。根本の問題意識として、２１世紀になって顕著になっている宗教的対立が、近代国家が標榜する《世俗主義》の原理によってもたらされているのではないかとの逆説的仮説にたっている。その解明のために、EU の主要加盟国制度に今日の《世俗主義》の社会的実態の「具体的な細部の正確な知見」（工藤庸子、『砂漠論』2008 年）を求める。

世界に対立の要因は尽きることがないが、2001 年のいわゆる「９・１１同時多発テロ」以来、宗教が対立要因としてあらためて意識されるようになっている。ＥＵ研究においてもトルコ加盟の大きな課題のひとつは宗教要因であることは明白である。また、今年なって、公共の場でのブルカ着用を禁止する立法がベルギーで成立し、フランスにおいても、同様の法の成立へ向けて上院(セナ)でも法案が通過した。しかし、わが国のＥＵ研究において、宗教は特定の政策や問題と結び付けて論じられることは回避され続け、いくつかの出来事の思想的、文化的背景として言及されるにとどまっている。2009 年 12 月に発効した EU 基本条約である「リスボン条約」において宗教団体との対話が明記されたことは、EU 統合のプロセスにおける宗教の役割が認知されたことを意味する。こうした状況のもとでの、これまでの日本における EU 研究がタブー視していた宗教課題と向かい合うことが必要であろう。その結果、「宗教」は、単に新たなひとつのアクター要因に過ぎないのか、もしくは、因果関係に新しい道筋を提供する要因であるかが明らかになり、EU 研究にさらなる厚みが加わると考えられる。本研究は、２１世紀の実態に照らした《世俗主義》の意味を問い直し、国家の枠を超えた政教の協働としての《世俗主義》理論を再構築し、「世俗指標」を制定し、EU 統合に新たなメルクマールを加えるための萌芽的研究と位置付けた。

３．研究の方法

（１）文献による知見の獲得

「世俗主義」に関する英語文献を中心に新たに５０冊程度の書籍を購入した。この中には、長く購入を考えながらも入手できていなかった文献も含まれる。本研究に着手したことで積極的に文献収集をおこなうことができた。

（２）現地での聞き取り調査

① トルコへの調査旅行を実施して、現地での「世俗主義」に関する論考を発表している４名の研究者との意見交換を行った。

② 研究期間の２年目に開催された「世界政治学会」に参加して、宗教関連のセッションに参加した。日本での研究仲間と開催したセッションは、より広く聴衆を募る意味をこめてガバナンスを課題とした。

（３）内外のＥＵ研究者との議論

研究期間の最後の時期に、日本におけるトルコ研究者２名を招聘したミニ・シンポジウムを開催し、２年間の研究での知見をまとめて報告をした。「アラブの春」を中心に、トルコの世俗主義をじっくりと議論することができた。

４．研究成果

本研究にとりかかるのとほぼ時期を同じくして、いわゆる「アラブの春」と称される体制変動が、アラブ・中東諸国で次々と起こった。この一連の変動がＥＵにもたらす含意は深く、ＥＵに対して、これまでのイスラーム圏諸国に対する政策の在り方を根本から問い直すことを要求したといえる。それに対するＥＵの反応は鈍く、体制変動を経験した諸国に対しても従来の政策を継続することでしか対処できていない。こうした状況に遭遇したことは、本研究の課題設定に一つの明確な視点を与えてくれた。

ＥＵ研究の進展は、３０年規則による文書公開の貢献もあり、今世紀になってからは、特にめざましいものがある。しかし、宗教的課題は相変わらずとりあげられることが少なく、とりあげられてもキリスト教をめぐる研究課題が圧倒的である。ところが、ＥＵ域内で問題視されているのはイスラム教をめぐる諸課題であり、キリスト教文化と他の宗教との共存の方法である。こうした問題意識に基づいて、「アラブの春」は重要な事例を提供してくれるできごととなった。

研究の主要な成果は、ＥＵが同時代的に遭遇し対峙することになった宗教的課題、事実とその展開の確認、ＥＵの反応の分析を整理する作業を実施したことである。

得られた成果のインパクトは、未だ限定的に過ぎない。アラブ・中東地域の体制変動は未だに現在進行形であり、研究成果の位置づけのためには、継続して中期的な事実の確認と分析が欠かせない。

したがって、当初に目的としていた政教の協働の可能性を測定する作業は、やや視点を変えて、ＥＵ統合における「世俗主義体制」の位置づけから喫緊の現実的問題としてのイスラーム国家との関係の在り方へと重点を移すこととなり、そのためには２年の研究期間はあまりにも短期であった。当初の計画に照らして成果を整理する。

<u>何をどこまで明らかにするか</u>

本研究は、EU 統合において、補完性原理などの、宗教（特にカトリック）の要素が制度設計に反映されていることを設立条約に基づいて、まず明らかにする。次いで、EU 加盟国フランスとベルギー、EU 候補国でありフランスに範をとった世俗主義のトルコの三カ国の制度運営について、法制度、主要なアクター、国家の介入の度合いなどを現地調査を実施して**実態的に**明らかにすることを計画した。トルコにおける現地調査を実施して、研究者との意見交換により、トルコについては当初の研究目的を一定程度達成できたといえる。このことは、研究後期に集中した「アラブの春」の考察で生かされた。しかし、フランスとベルギーについては、文献による確認にとどまった。

<u>本研究の予想される結果と意義</u>

2 年間の研究では、まず、EU 統合過程における宗教課題の「在りか」を解明するが、そのためのキー概念は、「世俗主義」である。その運営の実態を確認することで、理念、思想としての研究分野であった世俗主義の政治社会学的な地平を広げ、EU のような統治システム研究との連携が可能となる。本研究はその先に、宗教を超えた世俗化の指標を設定し、国際協調の新たなメルクマールを提案することを射程においている、とした。この点については、世俗主義がいかに統治システムに制度化されているかを文献において確認した。ここまでの結論は、世俗主義の多様性であり、ＥＵがキリスト教クラブであるという平面的批判には大きく反して、宗教の扱われ方そのものが、いかに加盟国間で異なっており、世俗主義の制度化の多様性を、歴史的経緯を追いながらさらに調査することを次の課題としている。

５．主な発表論文など

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　3　件）

１．<u>Machiko Hachiya</u>, “New Challenges for the Turkey’s EU Accession - ‘Arab Spring’ and after” (to be published) in “EU and Asia - New Challenges”, National

Taiwan University EU Centre.　(提出、2013年３月）査読有、ＤＯＩコードおよびＵＲＬなし。

２．八谷まち子【資料紹介】「ゲルハルト・ロッベルス編『ＥＵ２５か国における国家－教会関係』」『政治研究』第６０号、２０１３年３月、九州大学政治研究会。
査読有、ＤＯＩコードおよびＵＲＬなし。

３．八谷まち子「トルコのＥＵ加盟の新たな課題 - 「アラブの春」、そして・・・」『法政研究』第７９巻第３号、平成２４年１２月、九州大学法政学会。
査読無、ＤＯＩコードおよびＵＲＬなし。

〔学会発表〕(計　2　件)

１．八谷まち子「トルコのＥＵ加盟の新たな課題」ミニ・シンポジウム「アラブの春とトルコ」にて報告、２０１３年3月３日、中央大学駿河台記念館、東京

２．Machiko Hachiya “Arab Spring” and its impact on the Turkish Accession to the EU, EU Centres Round Table, January 29-30, 2013.花連大学、台湾。

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　八谷　まち子(Hachiya, Machiko)
　九州大学、法学研究院・教授
　研究者番号：40304711